

〈研究ノート〉

近現代の上海におけるカトリックの社会福祉活動及びその意義

沈 潔

要約

本稿は、1911年の近代国家成立から1978年の鄧小平の市場経済改革政策導入までの間における中国のカトリック宣教及び福祉活動について考察する。

中国の近現代では、まさに激動といえる変化をしてきた。1911年に辛亥革命が起こり、封建王朝の清朝が倒れたことによって、近代的国民国家である中華民国が立ち上がった。そして、1931年に満洲事変が勃発し、中国国内の抗日運動が1945年の日本の敗戦まで続いた。1949年によりやうく社会主義国家の新中国が成立したが、くり返される政治運動によって人間不信を引き起こした。また、バチカンとの断交や1966年から起こった文化大革命によって、中国の人々はあらゆる宗教と断絶される状況となった。こうした背景のもとに中国カトリックは幾多の苦難を経てきた。

以下、上海を事例に近現代中国におけるカトリックの福祉活動と中国近代国家の形成及び近代化との関連性を考察してみたい。

キーワード 上海カトリック、医療福祉活動

目次

1. 上海におけるカトリックの修道会及び福祉活動（1950年まで）
 - 1) 初めての中国カトリック信者の誕生及び信者の福祉活動
 2. 上海におけるカトリックの医療・教育・福祉活動
 - 1) 医療活動：教会病院及び看護学校
 - 2) 福祉施設
 3. 改革開放以後に上海カトリックの福祉活動状況
 - 1) 上海天主教知識人連合会
 - 2) 天主教愛徳養老院（有料老人ホーム）
 - 3) 天主教光啓老年リハビリ病院
- まとめ

1. 上海におけるカトリックの修道会及び福祉活動（1950年まで）

1911年から1949年までに、中国の社会福祉事業の一部は、宗教的な団体でしかも外来宗教であるキリスト教やカトリックなどが支えていた。この時期において、カトリックの具体的な活動がどういう状況だったのか、また、1949年後の社会主義体制としての中国では、カトリックの活動がどのように変わったのか、以下に上海地域を事例に考察してみる。

上海におけるカトリックの福祉活動は、上海の開港の直後に始まった。1844年上海イエズス会管区長の南格禄 (FrGottelanci ClauoleSJ) は、上海の宣教活動の計画のなかで福祉活動についてこのように語った。「上海では中国人神職人材育成のために修道院、修士学校の新設のほか、病院、孤児院の建設も考えるべきである」、「慈善事業を支える修女の育成を考えなければならない」などの記録があった^[1]。

中国の都市の中で、上海はもっとも早く西洋の文化と接触した都市の一つ。1608年に早くも、中国の有名な科学者である上海人の徐光啓が、上海の徐家匯に中国最初のカトリックの礼拝堂を建立した。こうした西洋の文化との接触が、上海の自由的、開放的な空気を醸成した。

1) 初めての中国カトリック信者の誕生及び信者の福祉活動

①中国最初のカトリック信者

徐光啓 (1562～1633、明末に内閣大学士までに昇った政治家であり、早くからマテオ＝リッチら宣教師と親しくし、自ら洗礼を受けて入信した政治家・学者) の著した『農政全書』(徐光啓死後の1639年刊) は、古来の農学書の諸説を12部門に分類・整理して記述した農政関係の総合書である。

また同じく徐光啓がアダム＝シャールらイエズス会宣教師の協力を得て西洋暦法によって編纂した『崇禎暦書』(1634年刊) など多くの技術関係書を刊行した。

②福祉活動に関わる修道会

I. 慈幼会

慈幼会 (Salesians of St. J. Bosco)、1857年にイタリア人によって創設された修道会である。1923年に上海に進出し、1925年に貧困児保護事業を開始し、その後、子ども教育のために、工芸学校を開設した。日中戦争中に、日本軍に協力し、戦後にアメリカ軍に協力することになった。アメリカ軍との密接な関係を持ちながら、大量な物品を得て、活動を続けていた。1948年まで司祭、修道士、神学生など聖職者81人、そのうち神父37人、神学修士30人、輔理修士14人がいる。会院、教会、修道会、学校の外に、児童救済、児童を対象にする印刷物の発行などをおこなっている。

II. 主母会

主母会 (Marist Brothers)、フランス修道会によって創設された。1909年、イエズス会から上海にある二つの学校を接管し、学校教育を主な活動とした。1949年に上海の主母会の修道士、聖職者は48人おり、そのうち、外国籍者32人、中国籍者16人であった。

III. 廬森堡仁愛修士会

廬森堡仁愛修士会 (Lusamber Brother of Mercy)、1851年ドイツで創設。1923年に修士を上海に派遣し、また、普慈療養院を立ち上げて医療・看護を中心に活動を行っていた。仁愛修士会の修道士は、司祭に昇格しない規則があり、社会奉仕活動に専念できるという考えである。

IV. 聖母献堂会

1855年、イエズス会の宣教師の提唱によって創立されたもので、中国人シスターの修会である。主に児童教育、医療救助などの活動を中心に、またはシスターの教育、聖書班の運営なども取り込んでいた。1937年まで、シスターは240人に達したことがあり、上海教区に務めるほか、他地域にも派遣している。1955年、修会活動が政府に停止され、1958年、上海地域のカトリック教会再編成の際、上海教区修道院に合併された。

1985年改革開放後に、上海教区主教の提唱によって聖母献堂会が復活され、その年にシスター初学院を開設し、シスターの人材育成に役割を与えられた。1989年まで38人の女性が5年間の学習を経て、改革開放以後の中国初めてのシスターとなった。1998年に聖母献堂会のシスターがすでに100人を超えた。そのうち、何人かが海外の神学学校に留学に行った。

V. 拯亡会

拯亡会 (Helpers of The Holy Souls) は1856年にパリで創設された修道会で、慈善事業に従事することがおもな趣旨である。同治6年 (1867年)、シスターを上海に派遣しはじめ、同治8年に上海徐家匯で聖母院を造り上げた。1937年の時点でシスターは183人、うち109人が中国人、ほかの74人が外国籍のシスターであった。1950年の時点で、シスターがやや減って170人となった。拯亡会会長及び聖母院院長がいずれもフランス人で、1953年、外国人宣教師追放運動が起こされ、管区長・院長をはじめとした外国籍のシスターは、ほとんど海外に追放された。

拯亡会は上海に本部といくつかの支部を設けた。上海で取り組んだ主な社会事業は、徐家匯聖母院育嬰堂、聾啞学校、施療所、工場、聖誕学校、徐匯女中学校、啓明女中学校、曉明女子中学校、孤児院、善導小学校などがある。上海で取り組んだ福祉事業の規模は、イエズス会に次ぐ2番目となっている。

VI. 仁愛会

仁愛会は1633年、パリで創設された (英語名 Sisters of Charity フランス語名 Filles de la Charite)。同治2年に上海での活動をはじめ、特に医療救助活動に積極的で、多くの業績が残されていた。1940年の統計によれば、仁愛修道会は、上海を含め全国各地で奉仕活動に従事するシスターが401人、そのうち中国籍のシスターが237人。また、41ヶ所の病院、52ヶ所の小中学校を運営していた。

VII. 方濟各女修会

方濟各女修会 (Franciscan Missionaries of Mary) は光緒12年 (1886年) に中国の煙台で宣教活動が始まって、1913年、上海に入り、救貧、救療活動に関わることとなった。1924年、上海で楊樹浦聖心病院、中比鐳錠病院を経営し、1934年、聖心看護学校をも経営した。1950年まで同修道会にシスターが102人、そのうち外国籍のシスターが70人となっている。1953年、大部分の外国籍のシスターは、上海を離れ、自国に戻った。

VIII. 安老会

安老会 (英語名 Little Sisters of the Poor フランス語名 Petites Sœurs des Pauvres) は、

フランス系の組織で、名称の通りに、身寄りのない老人に世話することが趣旨である。光緒30年（1904年）に7人のシスターを上海へ派遣し、32年に上海で安老院及び修道会を創設した。1933年の時点で同修道会がシスター 40人前後、イギリス、フランス国籍のシスターも多数いた。1950年の時点で、シスターが22人に減り、そのうち、中国籍のシスターが10人いる。

IX. 聖衣会

聖衣会（Carmelite Sisters）はスペイン系の修道会で、厳しい会則があることで有名となる。同治8年、フランスから7名のシスターが上海に派遣されたことがきっかけで、社会奉仕活動が始まった。1937年の時点でシスター 18人、1950年までに14人、外国籍のシスターが6人いる。

X. 聖心会

全称は耶穌聖心修女会（Sisters of the Sacred Heart）である。パリで創設された修道会で、女子教育に力を入れている。1926年に上海で拠点をつくり、居留外国人の子女のために、女子学校を開設した。1932年に中国人を対象にした女子小学校を新設し、1937年、ふたたび震旦女子文理学院を開設した。1950年までにシスターが34人いる。

XI. 善牧会

1825年にフランス教会によって創設された修道会である。英文名称はSisters of good Shepherdという。1931年、上海にシスターを派遣し、1933年に上海で会院と善牧会を創設した。善牧会は風俗業界に陥った女性や貧困女性の救助活動を主要活動とした。1937年の時点で当該修道会はシスター 17人、収容女性84人がいた。1950年にシスターが7人しか残されてなかったが、ほとんど外国籍のシスターであった。その時に収容した女性が多く、157人であった（子どもを含む）。

1950年の時点で上海に残されたカトリック修道会は、表1に示されたとおり。

表1 1950年時点の上海カトリック修道会一覧

団体名称	活動領域	シスターの国籍	創立年(年)	来中の時期	1950年まで 聖職者数(人)
献堂会	女子教育、育嬰、 医療救助	中国	1855	不明	不明
拯亡会	女子教育、慈善事業	フランス、中国	1856	1867	176
仁愛会	看護、救貧	フランス、中国	1633	1847	161
方濟各会	医療・看護	フランス、中国	1877	1886	103
安老会	老人救済	フランス、中国	1839	1904	24
聖衣会	隠修	フランス、中国	1248	1869	15
聖心会	女子教育	アメリカ、中国	1800	1926	43
善牧会	婦女救養	フランス	1641	1931	9
母佑会	女子教育、慈善救済	イタリア、中国	1872	1923	18
廬森堡方濟各会	医療・看護	ルクセンブルク	1847	1928	33
高隆朋修女会	女子教育	アイルランド	1922	1926	
耶穌孝女会	宣教活動	スペイン		1931	8
勞萊德修女会	女子教育	アメリカ	1908	1946	5
社会服務修女会	社会奉仕	アメリカ、中国	1812	1923	5

また、1950年の時点で残されたその他の教団は以下の通りである。

I. 中国天主教福祉会

中国天主教福祉会の英文名称はCatholic Welfare Committee of Chinaとなっている。1946年に敗戦後の善後処理のために創設された組織である。その年に、アメリカ政府は戦争被害国に対する救済援助の目的として、中国政府に3,000万ドルの支援金を中国のカトリック教会に寄付した。これをきっかけに中国天主教福祉会が創設され、寄付金を有効的に使いながら、戦後の戦後処理活動に積極的に関わった。同会が主に取り組んだ戦後救済活動は、救済物資の配布、募金などであった。アメリカ人の神父FrG. Mckernenが会長を務め、1951年に中国政府の指示によって同会は解散された。

II. 上海公教進行会 (Catholic Action)

上海公教進行会 (Catholic Action) は、カトリック教徒の社会奉仕活動団体である。1913年上海で創立され、学校教育、慈善救済などさまざまな活動に取り組んでいた。日中戦争勃発後、活動が中止したという。

III. 善会

カトリック教徒が教会活動や教徒間の相互扶助活動を支えるために組織された団体である。当時、上海地域に多数の善会が結成された。

2. 上海におけるカトリックの医療・教育・福祉活動

1) 医療活動：教会病院及び看護学校

アヘン戦争以後、カトリック教会は上海で病院の建設をはじめた。初期においては、病院は租界の斡旋によって教会に管理委託される形になっていた。これは専ら在留外国人への医療サービスの提供しかなかった。しかし、次第に社会活動に意欲的になり、医療を通して布教を行うようになった。困窮した病人を無料で治療する教会の病院も出現した。しかし、このような病院は医療水準が低く、困窮した中国人病人を医療の実験台にするというようなこともあって、中国人に敬遠されていたという。その後、徐々に中国人住民の理解を得られて、救済サービスを通じて教徒がだんだん増えていた。カトリック教会は上海郊外や住民の居住地域に数多くの診療所を設けた。

また、カトリック教会が西洋医学、医療設備を導入して医療関係の人材を多く育てたことが評価される。日中戦争の初期においては、教会病院が臨時病院を作って、多くの医者を派遣し、避難所に薬を届けるなどして、戦時救済に一定の役割を果たした。

1949年の統計によれば、上海市にカトリックが経営する病院11ヶ所、受けた患者数が26,443人、診療所60ヶ所、受けた患者が943,655人という。

I. 公済病院

公済病院は、フランスの軍人病院として1864年に中国で設立された。また、1890年、仁愛会のシスターは病院のそばに中国人を対象にした病院を設立し、100病床を設け、無料で中国人患者の診療が始まった。1913年に方済各会のもとで運営することとなった。1920年、

病院は大幅に拡大され、仁愛会、方濟各会の共同運営となった。当時のデータによれば、毎年に約3,000人の入院患者を受けたという。しかし、入院患者の多くは、在留外国人である。入院患者のうち、洗礼を受けた人がたびたびあった。

1927年以後、病床が500床に増加し、中国患者の治療も積極的に受け入れているという。太平洋戦争中に、病院が日本軍に徴用されて、戦後、上海市政府に接収された。現在、上海市第一人民病院となっている。

II. 広慈病院

広慈病院のフランス語名称はl'Hopital Sainte Marieとなる。1907年、上海フランス租界とカトリック教会が共同で創設され、そして仁愛会のフランスシスターに運営を委託した。広慈病院は、フランス租界の病院として在留フランス人の医療が中心業務となっている。その後、中国人の診療、入院をも認めるようになった。1935年病床数が650床に拡大したが、1942年の時点で、800床まで増加し、大規模な病院となった。カトリックの病院として全国に名を知られる。

同病院の院長は規則により教区の神父が務めることになる。しかし、日本軍の敗戦後、国民政府は教会病院の院長が中国人でなければならない規則を作り、1946年以後、院長が中国人医師となった。しかし、経営の実権はあいかわらずフランス人に握られていた。1948年の統計によれば、収容した入院患者は10,662人、施術された患者は5,467人、助産された患者は1,042人、外来患者は137,339人でした。1947年まで病院の院長は、フランス人の神父が務めていたが、その後、国民政府の要請で中国人に代わることにした。

この病院は、1952年に上海第2医学大学の付属病院になった。

III. 安当病院

安当病院は、宣統2年にフランス仁愛会修女会によって創立された病院である。創立当初の趣旨は、信者でない貧窮中国人の医療救助が主な目的であると明記されている。100病床の規模で、震旦医科大学の3年生の学生が診療、治療をになって、看護をシスターが行っていた。1936年の統計によれば、その年に入信した患者は974人、そのうち243人が洗礼を受けたという。

1949年に貧民病院に改名し、1950年代に上海市肺結核予防病院になった。

IV. 聖心病院

聖心病院の前身は上海公教進行会が1916年に設立した小さい救貧診療所である。1923年に総合病院までに拡大し、外来部、入院部など6棟の病棟を設けた。1931年、中国・ベルギー庚子賠償金でフランスからラジウム設備を購入し、上海はじめてのラジウム科を成立した。その後、ラジウム科が独立し中比鎔錠病院（中国・ベルギーラジウム病院）になった。

病院にフランス、ドイツ、イタリア諸国の医師はそろっていたという。日中戦争中に、日本軍に徴用され、一時的に傷痍病院となった。その後、病院の規模はだんだん縮小されたようである。1951年、上海市第2労働者病院に改称した。

V. 中比鑄錠病院

中比鑄錠病院の前身は、聖心病院であり、1931年以後、聖心病院から離れ独立した。病院最初の趣旨は、貧窮者に救療活動を行うことであったが、その後、一般患者に向かうという方針に変わった。

VI. 普慈療養院

普慈療養院は上海公教進行会によって創設された精神病院である。病床が600床で、病棟が男部、女部に分けられている。1951年に上海市北橋精神病院に改名された。

VII. 診療所

病院のほか、多数の診療所がある。診療所の日常運営と診療は、医師ではなくシスターであった。診療所に訪ねる人は、ほとんど貧民たちで、診療を受けた後、洗礼を受けるケースが多いという。

2) 福祉施設

I. 土山湾孤児工芸学校

道光27（1847）年、フランスイエズス会は孤児を収容するために設立された施設である。設立当初に男児、女児を問わずに受け入れたが、その後、男児のみになっていた。孤児院は孤児たちに自立出来る技能を身につけるために、裁縫、大工、印刷工場を設けて、子どもたちが工場で働きながら腕を磨いていた。

しかし、孤児院の工場学校が開設してから貧困家庭の父母たちが子どもに一芸を身につけさせるために、子どもを孤児院に送るケースが増えてきた。その後、孤児院が院の中に貧困家庭の子どもを対象にする学校と工芸学校をつくり、こうした子どもを受け入れるようになった。院の規則によって、子どもが入院してから父母の親権は失われると規定されている。

孤児院の子どもたちは成年になったら、ほかの孤児院の女の子と結婚させて、教会が新婚夫婦に住居を提供する。しかし、教会仕事に従事することが条件となる。

1953年に孤児院は上海市政府に接収され、中国人教徒が院長に指名され、もとの体制のままに維持された。当時、在院の子どもが200人前後いる。1960年代に中国国内の社会変動にしたがって孤児院体制及び工場などが解体された。

孤児院の工場から生産された家具、民芸品などは、日本、東南アジア地域まで流通していたという。

II. 徐家匯聖母院育嬰堂・幼稚園

徐家匯聖母院育嬰堂は同治8（1869）年にフランス拯亡会修女会が献堂会に運営された育嬰堂を改編、拡大して設立されたものである。育嬰堂の場合は、幼児部が男女混合となっていたが、男の子が7歳になると、土山湾孤児院に転院させる。7歳になった女の子は幼稚園に行かせる。1913年に出版された『上海徐家匯聖母院育嬰堂概況』の記述によると、「毎年統計によって4,000人前後の嬰兒を受け入れており、しかし多数の嬰兒を受けたが生存率が大変低い。現在、在院孤児たちの状況は2～3歳120人、15歳以上80人、合計550前後いる」と

いう。また、1930年の『徐匯略記』の記載によって、「当該施設が創設以来11,464人の孤児を受け入れた」。ほかには、1944年に『聖心報』に報道された記事によれば、「受け入れた子どもが8万人いる。1.28事変後、孤児が急増し毎日送られた子どもが少ないときに10人あまり、多いときに30人にのぼる」という。死亡率が大変高く、入院子どもの死亡率が平均90%までのぼった時期もある。

新中国成立以後、上海市政府が育嬰堂・幼稚園を接収し、亡くなった子どもたちの遺骸を集めて「万嬰公墓」をつくった。

Ⅲ. 新普育堂

新普育堂の前身は清末に官府主導で創立された救貧施設「普育堂」である。1911年、上海公教進行会が市議会の依頼を受けて普育堂の組織及び事業を改編、拡大し、「新普育堂」がつけられた。その後にも収容人数の増加にしたがって、事業の規模が大きくなって1949年には2階立ての収容棟が20棟にまでなってきた。フランスの仁愛修女会が日常の運営管理を営み、運営資金が政府の寄付となっている。新普育堂の内部に、貧病院、老人院、残廢院、貧児院、精神病院、女子寄養所、育嬰院、伝染病院、施療所、習芸所、小学校を設けて、定員が1,500人となっている。文献資料によれば初年度に大勢の収容希望者が殺到し、定員を大幅に突破して6,021人にのぼった。しかし、死亡率も高く、その時に6,021人の内、1,258人が死亡となった。

教会の統計によれば、新普育堂の設立以来、収容人数10万2千人、医療救助人数219万4千人という。1945年日中戦争後、教会の運営経費が枯渇になっていって、国連の戦後救済支援金によって運営を継続していた。1950年代初期、新普育堂が上海市政府に接収され、上海市児童福利院に改名された。

Ⅳ. 安老院

光緒32年にフランス安老会のシスターによって創設された老人施設である。入所者はだいたい300人前後いる。ある統計によれば、1929年まで入所者は延べ3,128人、その中2,240人が安老院で死亡、1,685人が洗礼を受けた。安老院の運営経費は、主に社会寄付によるものである。

1950年時点で在籍老人が350人前後、シスター 28人、院長及び主なリーダーのほか、ほとんど中国人シスターである。1953年、上海市政府に接収され、外国人シスターが海外に追放されることになった。

3) 文化事業

文化事業としては、下記の一覧となる。

教区境内天主教教会主宰雑誌一覧^[2]

名称	主編	刊行日期	主な内容	停刊日期
益聞録	李問漁	1879年（週刊）	天主教教義、西洋科学の紹介、時事、新聞伝記など	1898年4月に格致新報統合、匯報へ改称
匯報	李問漁	1898年4月（週刊）	天主教教義、西洋科学の紹介	1911年
聖心報	李問漁、藩谷声など	1887年（月刊）	天主教教義、教理宣传、記事、祈祷意向、共產主義への批判など	1950年
聖教雑誌	藩谷声、徐宇澤	1912年（月刊）	天主教教義、教理、教史の宣传、記事、社会問題、教会指令、共產主義への批判など	1938年
聖体軍	王昌祉	1934年（月刊）	児童教育、聖体尊敬など	1934年
慈音	張若瑟など	1937年（総月刊）	聖母会教義の宣伝など	抗日戦争後期に
信鳩報	顧裕祿	1951年	反帝国主義、愛国、愛教	1962年

3. 改革開放以後に上海カトリックの福祉活動状況

1978年、改革開放後から現在まで、上海のカトリック活動は順調に復活しつつある。現在では、教会が104カ所、聖職者158人（大司教、司祭、シスター）、信者14万人いる。福祉活動も積極的に取りこんで、代表的な活動を以下のようにまとめられる。

1) 上海天主教知識人連合会

該連合会は1986年に信者たちによって自発的に組織された社会サービス、福祉サービス供給のグループである。当初十数人しかいなかったが、現在600人を超える強大なNPO組織となった。連合会の主なメンバーは、各大学、病院、学校の定年退職者で、定年になっても自分が持っている一芸を社会に奉仕できるようにというきっかけで発足された。当時、社会福祉供給などにカトリックの参与は難しいと見られたが、ちょうどその時期に海外留学ブームが発生し、初期に取り込んだ事業は外国語教育であった。1986年に光啓外国語学校を開設した。1990年代以後、カトリックの社会福祉供給への参与を認めるようになり、それをきっかけに1992年に医療相談、診療所を開設し、または、地域の中で巡回診療なども加えた。これらの医療活動にあわせて、教会は地域の低所得者、貧困高齢者に無料医療券を配布し、低所得者たちは無料券で受診できる。一般の人に対しては有料となる。時代の要請に答え、1995年にパソコン教室を開設し、1998年に高齢者リハビリセンターも開設した。

2) 天主教愛徳養老院（有料老人ホーム）

1992年に上海閔行区天主教愛国会は、政府に返還された教会土地資産を活かして、療養型高齢者福祉施設を建てた。この老人ホームは「愛徳」を名称にし、文字通りに人に愛を与え、社会に道徳を重んじることである。ホームは別荘風のような建物で、1人部屋と2人部屋

のタイプに限定し、サービスの良さと環境の良さが好評を博し、常に満員状況となっている。定員が100人で、信者であるかどうかを問わず、誰でも入居できる。経営主体は閔行区天主教愛国会となり、日常的な運営にはシスターたちが関わっているという。

3) 天主教光啓老年リハビリ病院

2004年に、上海天主教区社会服務センターが地域医療の病院と協力体制で成立した病院である。協力体制とは、病院の敷地、設備などが政府所管の地域病院に所有するが、天主教区社会服務センターが主に医療人材、日常管理などに責任を負う。現時点では宗教団体の独自の開業は政府に認められていないため、こうした形で新たな道を開拓していこうという教会の狙いがあった。現在、非政府、非営利医療団体として登録されている。

教会はこれを拠点に地域で生活している高齢者のニーズ、収入状況に応じて有料、低料金、無料医療及びリハビリサービスを提供する。無料医療の提供は、教会から貧困高齢者に無料診療券を与え、無料診療券を使ってサービスを利用する形である。現在、中規模な病院までに発展し、地域住民の好評を博している。

まとめ

上述したように、1911年から1978年までの間に、中国カトリック及びその福祉活動は最盛の時期、弾圧された時期、不法である「地下教会」と合法である「地上教会」の分裂の時期など、幾つかの時期を経て、さまざまな困難を乗り越えて継続されてきた。特に、社会主義革命の洗礼を受けることは、中国のカトリックに独特な色彩を染めた。中国では、宗教を中国社会システムの中での一つの子系統として扱って、中国社会の発展の貢献度から宗教団体を評価している。改革開放以後にこういう傾向がさらに強化されている。そのため、カトリックの社会福祉活動が中国社会の安定、住民生活の向上につながっていると見られて、一定の評価を与えられている。今後、福祉サービス供給におけるカトリックの役割が大いに期待される。それに伴って、中国のカトリック教会もそこから活動の場を得るようになっていくであろう。

また、改革開放後、中国社会全体は宗教に対してより寛容的、容認的な態度を広げ、いまままで抑圧され、弾圧された信仰がすでに復活しつつあることも見落とせない。しかし、こうした教会は、社会主義革命を歴史上の事実として受け止め、それ自体変化しつつけている中国社会の中で自分に対しての信仰を新しい方法で実践し、新たな創造力を持っている。現在、上海カトリック教会の社会福祉活動の取り組みはまさにこのような実践活動の好例と言える。

注

[1] 上海宗教史編纂委員会『上海宗教史』参照

[2] 上海地方誌弁公室『徐家匯上海天主教教務中心について』参照

参考資料

1. 上海宗教史編纂委員会『上海宗教史』参照
2. カトリック中央協議会『カトリック教会情報ハンドブック』「中国のカトリック教会－歴史、現状、展望」2007
3. 『中国宗教とキリスト教の対話』刀水書房
4. 生江孝之『支那社会事業調査報告』興亜院政務部 昭和15年
5. 朱龍華主編、郭衛東著『中土基督』雲南人民出版社 2001年
6. 顧為民著『キリスト教と近代中国社会』上海人民出版社
7. 顧長声著『傳教士と近代中国』上海人民出版社 2004年
8. 沙百里神父編『中国天主教指南2004年』新加坡中華公教連絡社出版 2005年
9. 孫尚揚著『1840年前的中国基督教』学苑出版社 2004年北京
10. 林悟殊著『唐代景教再研究』中國社会科学出版社 2003年北京
11. 張化著『上海宗教通覽』上海古籍出版 2004年
12. 王治心撰『中国基督教史綱』上海古籍出版社 2004年
13. 顧衛民著『中国天主教編年史』上海書店出版 2003年
14. 戚印平著『日本早期耶穌会史研究』商務印書館 2003年北京
15. 顧衛民著『基督教与近代中国社会』上海人民出版 1996年
16. 葛壮著『宗教和近代上海社会的變遷』上海書店出版社 1999年
17. 孫尚揚著『一八四〇年前的中国基督教』学苑出版社 2004年北京
18. 坂本陽明『現代中国とキリスト教』中央出版社
19. 岩本信夫『中国における外国人宣教師の殉教』聖母の騎士社
20. 沈潔著『満洲国の社会事業』ミネルヴァ書房 1996年

Summary

The Significance of Catholic Social Welfare Activities in Modern Shanghai

Shen Jie

It is examined about Chinese Catholic propaganda and welfare activities from the modern nation formation to the innovation of market economic reform policy.

It is the keystone that to declare the relation between Chinese Catholic welfare activities in modern China and the formation of the Chinese modern nation and the modernization.

Keywords Shanghai Catholicism, Medical Welfare Activities

(2008年4月22日受領)